みちのく

成 人 編

—第４４号—

令和５年度　仙台矯正管区

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十四号を数えております。

当管区では「みちのく書画文芸コンクール」を開催しており、本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内刑事施設の受刑者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和六年三月

仙台矯正管区

表紙の題字は久道石静氏の揮毫によるものです。

目次

【文芸部門入賞作品】
作文の部……【選評】原田勇男 先生……2
詩の部……【選評】原田勇男 先生……19
短歌の部……【選評】上林節江 先生……26
俳句の部……【選評】鈴木三山 先生……31
川柳の部……【選評】水戸一志 先生……36
文芸部門審査総評……41

【書画部門入賞作品】
絵画の部……【選評】枡澤 怜 先生……43
ポスター・カレンダーの部……【選評】鈴木智枝 先生……48
毛筆の部……【選評】鈴木霽月 先生……51
硬筆の部……【選評】鈴木霽月 先生……56
書画部門審査総評……60

作文の部

審査員

宮城県芸術協会会員
日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問

原田　勇男

金

十年

山形刑務所　A・H

その手紙は唐突だった。

差出人は父親。これまでのやりとりで両親が四年振りに面会に来てくれることになり、その日程が決まったことの報告だと思った。この四年間で二人共病気・手術と経験し、コロナもあり叶わなかったが、5類移行と感染が落ち着いたことでやっと来られる運びとなったのである。

手紙を開けて読んでみる。間違いない。一ヶ月後の月末に決まったことが記されていた。しかし、最後の一行を見て私の心は動揺した。

陽も行きたいというので連れていきます。

まさに青天の霹靂。なぜ陽が…。いくつものハテナが頭を駆け巡り、その後本当に会えるのかという期待と、どんな話があるのかという不安がごちゃ混ぜに私の心をかき乱した。

陽というのは私の息子である。いや、正確には息子だったというのが正しい表現になろうか。つまり、別れた元妻の連れ子なのである。離婚したのはちょうど十年前。当時陽はあどけなさの残る十歳の小学四年生であった。

しかし、夫婦のすれ違いから妻は子供を連れて家を出て行ってしまった。あのとき、他にとるべき方法があったのではないか、できることはなかったか。そんなことを何万回考えたか分からない。でも当時の私は別の道を歩む決断をしてしまった。

その後は一切の連絡を断ち、その三年後、私は事件を起こし現在に至る。

陽と出会ったとき、彼がまだ一歳半だったにしても、もうすでに自分と一緒に過ごしてきた時間すら超えてしまっているのである。陽は今年、二十歳になる大学二年生で、母子家庭の中、高校時代はバイトと勉強を両立し、学費資金を貯めながら、奨学金を推薦してもらえるほど優秀な成績だったという。

なぜ私がそこまで知り得ているかというと、私自身、事件を起こすまで知らなかったのだが、私の両親と元妻は離婚後も密かに連絡を取り合っていたというのだ。運動会などの行事の際は会いに行くこともあったという。事件を起こし、不安定な精神状態だった頃に初めてその話を聞いたときは、何を勝手なことを、と憤慨していた時期もあったが、今となっては親を通して数年おきに送られてくる子供の写真が何よりも心の癒しになっていた。

とはいえ離婚してからは両親も私の話をするのは気が引けていたようで、その上私が事件を起こしたことで、刑務所にいる私の事なんて話せるはずもなく、どちらともなくお互い気を遣い話題を避けてきたというのである。ただ、元妻は事件を知って陽に伝えていたというが、その後彼がどう考えていたかなんて伺い知ることはできなかったという。だから一緒に面会に行きたいと言われたときは、両親もそれは驚いたみたいだけど、願ってもない申し出で快諾したようだ。でも、どんな思いで、どんな話をするつもりなのかは、そこまでは聞けなかったという。

片親で育った子が大きくなり、自分のルーツを知りたいと実の父親を訪ねるという話はよく聞く。そう、実の父親であれば理解できる。しかし、血が繋がっているわけでもなく、一緒に過ごしてきた期間は十年にも満たない。現在法律上では、私と陽は養子縁組を外れた今、赤の他人なのである。ましてや重罪を犯し刑務所に収容されるような男に、わざわざ遠方から泊まりがけで来る価値なんてあるのか。むしろ私の事など幻滅し、二度と関わりたくないと思っていたほうが自然ではないか。いや、きっとそうであろうと、そう思われていても仕方のないことだとずっと思っていた。

もしかしたら、その事を告げるために来るのではないかと寝ても覚めても頭の中は不安で一杯にもなった。陽がどのような思いで会いに来てくれるのか、分からない以上はとにかく覚悟を決めて、何よりもまず謝ろう。誠心誠意謝って、あとは何を言われても何を聞かれても包み隠さず自分の

気持ちを伝えよう。二度と会うことすら叶わないものだと思っていた「奇跡」が起きようとしているのだ。この機会を決して無駄にしてはいけない。これが最初で最後の面会になろうと絶対に後悔してはいけない。そう決心した。

それからの一ヶ月は、改めて自分自身を見直した。ともすれば毎日の慌ただしい刑務作業や殺伐とした生活の中で、見失いがちになりそうなこと、自分の過去と過ちを振り返った。そして何より陽と一緒に過ごしてきた十年弱の生活のこと、一緒にいてあげられなくなった後悔と苦悩、離れてからの十年間想い続けてきたこと、どうやって話せばうまく伝えられるかずっと考えた。

どれだけ考えても万全とは思えず、眠れぬ日々を一日、一日過ごしながら、それでもあっという間に一ヶ月が過ぎてしまった。

そして面会当日。

平静を装わなければと思いつつも気負わざることはできず、緊張して面会室へ向かった。扉を開けると私の両親に挟まれるように陽が立っていた。もうそれだけで胸が一杯だった。泣いてしまったらしゃべれなくなってしまうと分かっていても泣きながら立ちつくしてしまった。そんな私を見かねて、両親が「ほら、大きくなったでしょ」と横に並んで声をかけてくれた。本当だ。写真では分からなかったけど私よりも随分と背が高い。マスクを取ってはにかんだ姿は私と違いとても格好よく、やはり自分には似てないなと思うと同時に、まだ小学生だった頃に、血縁を知らないパパ友、ママ友に「陽君はお父さん似だよね」と言われて一人で密かに舞い上がっていたことが急に脳裏に浮かんだりした。十年の月日はもはや私の知らない立派な青年へと成長させたのだとしみじみ思った。でも目を合わせて瞳を覗くと、ああ、やっぱり陽だなと感じた。変わらない面影を感じて嬉しくもなった。

会えたことに感無量で話そうとしていたことなど吹き飛んでしまったけど、ずっと会いたいと思っていたこと、会いに来てくれたことへの感謝、今まで自分のせいで沢山の迷惑をかけたこと、苦労をかけたこと、ずっと謝りたかったという私の話に、陽は一言も口をはさまず、うなずきながら耳を傾けてくれた。私は思い切って話を続けた。ずっと言いたかったこと、言えなかったことだ。それは家族として最後に会った日、夫婦で、お互いの為にもう二度と会わないようにしようという結論に至り、泣きじゃくる陽を抱きしめながら、そんな時に初めて私は彼に向かって血が繋がっていないことを告げてしまったのである。あの時は、もう二度と会えないのであれば自分の口で伝えなければ、と意を決して言ったつもりだった。しかし、まだ十歳の子に対して配慮が足りな過ぎた。自分のエゴだったとずっと後悔していた。本当に申し訳なかったと頭を下げて謝った。すると陽は目に涙を溜めながら「そんなことないよ…お父さん。」と言ってくれたのである。

私は溢れる涙を止めることができなかった。陽が私に対して「お父さん」と言ってくれたのである。これ以上の喜びがあるだろうか。最後まで私を否定する言葉もなく、長い時間を経て私はこの先自分の生きていく存在意義をひとつ取り戻せたような気がした。陽に、私に対して今まで思っていたこと、言いたかったこと、何でも聞くし答えると言ったときも、困った顔をして、そういうことは特にない。というのである。

ただ会いたかった。顔を見たかった。ただそれだけの理由で来てくれたのである。それを聞いた時の気持ちは、もはや言葉では表現できない。でも、今もそしてこれからもずっと私の胸に刻まれ続けていくだろうと思う。

陽に、息子に会うことができた。この出来事は確実に自分の中の意識を変える経験となった。自分の大切な存在が自分のことを待っていてくれる。これ以上身の引き締まることはないし、まだ先が長いからとあまり考えてこなかった将来のことも真剣に考えるようになった。そう思うと、残り十年という刑期が改めて重くのしかかってくる。そして犯した罪の大きさに気付かされる。陽と共に過ごすことができなかった十年、それはこの先も十年続いて行く。とてもとても長い道のりである。しかし、決してそこが

ゴールではない。むしろそこからが新しい人生のスタートである。

これまで沢山の人に迷惑をかけた。心配をかけてきた。贖罪の日々はこの人生が尽きるまで終わることはない。そんな中にあっても私のことを信じて待ってくれる人もいる。その人たちの恩に報いるためにも今は目の前のできることをひとつひとつ積み重ね、残りの刑期を全うしようと思う。

その先の十年に向けて…

寸評

それは一通の手紙から始まった。両親が4年ぶりに会いにきてくれるという。しかも離婚した妻の連れ子だった息子の陽も一緒に。妻子と別れたこの筆者は、全く連絡を取っていなかった。その後、事件を起こして10年の長い刑務所暮らし。迷惑をかけた息子にどう謝ろうかと悩んでいたが、血がつながらない20歳の息子は「ただ会いたかった」と言って涙ぐむ様子を見て、父親も涙を流した。親子の感動的な秘話に打たれ、金賞に推薦した。

銀

心境の変化

福島刑務支所　Ｉ・Ａ

私は今、母が私を産んでくれた年齢になりました。この年齢になっても、まだまだ一人前になれておらず、母の凄さをしみじみと感じています。

母のモットーは、『生きていればなんとかなる』です。「案ずるより産むが易し」と、よく言っていて、悩むよりもやってみなさいという考えで、ポジティブな人です。いつも豪快で、楽観的な母を、受け入れられない時期もありました。相談をすると、話は聞いてくれますが、「なんとかなるよ」という母の考え方に、お気楽すぎる…と苛立ったことが何度もありました。

今は、そんな母の寛大さに救われています。

私は事件を起こしてしまったことで、家族には辛く、苦しい想いをさせてしまっています。

警察署で家族と別れる時、母は私を強く強く抱きしめてくれました。私は、不安や寂しさから泣きじゃくっていましたが、母は涙を見せず、「大丈夫」と、何度も何度も言ってくれました。

あの時の母の心境を想像する余裕ができた今、本当に申し訳ないことをしてしまったと、後悔の気持ちが強くなっています。大切な我が子を警察に引き渡すことは、狂ってしまうくらい心苦しかったと思います。私なら、泣き崩れて、取り乱してしまうと思います。自分の苦しさ、辛さを見せず、不安がる私を「大丈夫」と、安心させるために振る舞ってくれた母には、感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです。母は強いです。あの時の力強い瞳を、今も鮮明に覚えています。

今、刑務所にいることは、決して良いことではありません。しかし、刑務所にいることで、考える時間、自分と向き合う時間を持てたことで、気付けたことが沢山あります。自分の心の弱さを痛感し、今までどれだけ家族に守られてきたかがわかりました。母の優しくて大きな愛、母の強さ、偉大さ、家族の絆の深さ、そして、私が母のこと、家族のことが大好きだということに、しっかりと気付きました。

最近、刑務所に来てしまったことは、私の人生に必要な事柄なのだと考え、与えられた期間を有意義に過ごそう、と前向きに考えられるようになりました。そう考えられるようになった私は、昔は嫌だった母の、なんとかなる精神が受け継がれている気がしています。私はネガティブで弱く、すぐにクヨクヨとしてしまうのですが、この数年で、悩んでも、「なんとかなるか」、「まあ、いいや」と、気持ちの切り替えができるようになってきました。その大きな転機となったのが、母からの手紙に書いてあった。

「人を批判したり嫌な態度をとったりせず、それを我慢した自分、努力した自分をほめてあげ、明るい自分でいた方が幸せでいられる」の言葉です。

明るくいられるかは自分次第なんだ、心を疲弊させるのはやめて、自分のために、明るくいようと奮起したのが始まりです。

離れていても、こうして私は母に守られているのだと改めて感じました。

母や家族は、私に資格を取得して、社会で自信を持って生きていけるようになってほしいと願ってくれています。その想いに応えたく、自分を成長させるためにも、医療事務の職業訓練を受講して、合格することができました。刑務所に来ていなかったら、資格を取ろうとは考えもしなかったと思います。来たことを肯定することはできないけれど、少し強くなってきたこと、成長させたいと思い、努力する姿勢が身に付いてきたことを考えると、私の人生には必要な時間なのだと思います。残りの期間で、社会で自信を持って生きていける力を付けられるように、地道に努力をしていきます。

罪を償うとはどういうことだろう？何をすれば償えるのだろう？とずっと考えてきました。私には何ができるのだろう？と、問い続けています。正解はないのかもしれませんが、考えて、答えを探している姿勢が大切なことだと思いました。迷惑をかけ、苦しませてしまっている母や家族を、

安心させられるように強くなることが、私に今できることで、償いの一つになるのではないか、と思っています。これからも、犯してしまった罪と向き合い、二度と過ちを犯すことのないようにするためには、何が必要かを考え、自分と向き合うことを続けていきます。

手を握っていてくれた、強く抱きしめて安心させてくれた母に、「今までありがとう。もう心配しなくて大丈夫だよ」と言えるくらい強くなり、安心させられるように成長をして、今度は、私が母を強く抱きしめたいです。こんなにも沢山の迷惑をかけている私のことを、見捨てずに支えてくれる母に、家族に、「もう二度と悲しませることはしない」と、強く誓います。

何事も自分のためになると捉え、常に感謝の気持ちを持って、前向きに受刑生活を送っていきます。家族の愛に包まれ、希望を持って歩んでいきます。

強い母の子です。私も強くなれる、そう信じています。強くなるために、弱い自分と向き合うことができる時間を与えてもらった今が、成長をさせる大きなチャンスだと思っています。この貴重なチャンスを逃さずに、一日一日を大切に過ごしていきます。

刑務所に来て、様々な経験をしてきたこと、自分と向き合えていることで、いつも周りの人に支えてもらって、今の私が在ることが、よくわかりました。そして、父と母の子に生まれてきて幸せだと、心から思えるようになりました。

いつか、私の子どもたちにも、私たちの子に生まれてきて良かったと思ってもらえるように、人として、ママとして、強く強く成長をして、たくましいママになりたいと思います。

『きのうより今日、今日より明日、少しずつ少しずつ、いつも希望と一緒に歩んでいこう！』

以前のように豪快に笑う明るい私を取り戻し、笑顔で、母と、家族と逢える日を楽しみに、前向きに歩んでいきます。

寸評

刑務所に入る前、楽観的な母の「生きていればなんとかなる」という考え方が嫌いだった。いつもポジティブで豪快な母に、お気楽すぎると反発した。しかし、この施設に入って自分と向き合う時間を持ったことで、母や家族にいかに守られてきたかが分かった。自立するために医療事務の職業訓練を受けて合格した。今では将来の子どもたちの強いママでありたいとまで考えている。この「心境の変化」に共感し、銀賞を贈ることにした。

銅

ヨシオカ

宮城刑務所　桜子

ストレプトマイシンが一般に普及したのはいつの頃だったろうか？結核の特効薬として知られていながら、高度成長を謳われたあの時代でも、まだ、易々と庶民の手に入るものではなかった。転地療法や気胸治療といったものですら、多くの人にとっては贅沢な望みだった。結局の所、その日の暮しにさえ事欠く貧乏絵描きは、日当りの悪い四畳半で天井を眺めているしかなかったのだ。

ヨシオカがそうだった。空気の淀んだ部屋で掻巻に背を丸め、始終、重苦しい咳を抱え込んでいた。そして、いくらかは発作が鎮まると絵筆に手を伸すのだ。

「描いていて恥ずかしくなるような駄作だ。」

〝阿片窟〟とでも呼ぶのが似合いの古びた長屋の一室で、ヨシオカは吐き捨てるように呟き、それから、ひとしきり咳に苦しんだ。

「そんな事はない。君にとっては絵を描くことが生きることではないか。」

私は励しにもならない励しを口にし、ヨシオカが投げたスケッチブックを手にした。

同じ美大で油彩を学んでいた頃、ヨシオカは〝手品師〟と呼ばれていた。それ程にヨシオカの絵には魔力のようなものがあった。

「何を言うか、僕の方こそ君の細密画の技術に感嘆していたんだ。」

だが、私の絵はそれだけだった。木の葉の一枚いちまいを、髪の毛一本いっぽんを緻密に写すことはできても、ヨシオカのような人を惹き寄せる魔力は描けなかった。

しかし、ヨシオカはヨシオカで、己れの絵画技術のなさに歯噛みし、私の絵から一本の線を学び取ろうとしていた。

私達が友情を分け合ったのは、だから、互いに吸収し合おうとしていたからではなく、互いが離れた隙に相手だけが何か新しいものを身に着けてしまうのではないかと怖れていたからだ。私が実家の援助でパリ留学を叶えた時も、身銭を切ってヨシオカの分を捻出したのは、友情の分かち合いなどではなかった。

少なくとも表面上は、我々は良き親友だった。パリのアパルトマンで固いパンを分け合う時にも、我々は絵画の未来を語り合った。

「僕には夢があるんだ」とヨシオカは言った。

「文芸の世界に同人誌があるように、絵画の世界でも若手の作品で同人誌を作るんだ。」

立派なカラー印刷である必要はない。白黒で構わないから、とに角、一人でも多くの人に見てもらい批評を乞う。

「発表の場を持たない若手が、自らその場所を作るんだ。新しい時代の絵は新しい人々によって描かれなければならないんだ。いつまでも権威や長老達の奴隷ではいけないんだ。」

ヨシオカの絵はそうした夢を語るに十分な輝きを放っていた。逆に、私の細密画は中世の古典的絵画と、寧ろ、冷笑の的だった。

私が画学を途中で引き上げたのは傾き始めた家庭のせいではなく、ヨシオカだけがただ一人、パリの息吹を自分のものにしていく不安に堪えられなくなっていたからだった。

だが、帰国した二人の絵に対する評価は逆転した。ヨシオカの自由奔放さは西欧フォーヴィズムの亜流ととられ、私の細密画は日本画の伝統に西欧の光を積み上げた新しい試みだと栄されたのだ。

権威ある絵画展で特選を受けた日、私は自分の名前が世に宣伝されることの快感を初めて味わい、そして、毒を身に浴びたのだった。

パリ時代から咳籠りがちだったヨシオカが肺結核だと診断されたのはその頃だった。

「焦ることはない。二人の夢を叶えるためにも、ここはゆっくりと養生するんだ。」

それでも、ヨシオカはカンバスに対った。ところが、油彩には欠かせな

いテレピン油の、画家であれば懐かしくも馴染みあるはずのあの匂いに、ヨシオカは激しい悪感と吐気を催すようになってしまっていたのだった。

励ましの言葉は、つまり、私の余裕の現われだった。だが、これを機に絵の事は忘れて療養すべきだという私の反対を押し切り、ヨシオカに水彩画を与えたのはチカコだった。

「あの人は絵を描いていなければ生きていけない人なんです。」

確かに、ヨシオカにとって〝絵〟とは生きることだった。無論、体力の萎えたヨシオカに、あの叩き付ける力強い筆致は望めなかった。だが、水彩の筆を持ったヨシオカは、新たな〝魔術〟に取り憑かれたのである。

一体に、肺病という病魔は、肉体を蝕みながら、しかし、削ぎ取られていく命を精神に昇華させてしまうものなのだろうか？

幽鬼となったヨシオカの水彩は、淡く消え入りそうな色合の重なりの中から光を紬ぎ出し、一瞬に消え去る命を、十号にも満たないスケッチブックの上に宿らせていったのである。ヨシオカは憑かれたように描き続けた。画題もない、サインすらない小品の習作ではあったが、私を打ちのめすには十分過ぎる完成品だった。

「彼の絵を先生の手で世の中に出してもらえないでしょうか。」

私のことを〝先生〟と呼んで、チカコはスケッチブックを差し出した。

私は怖れた。ヨシオカの絵は画壇に衝撃を与えるだろう。それは許されないことだ。画壇の注目を浴び、喝采の中心に立つのはこの私でなければならなかった。そして、私にはもうひとつ、手に入れたいものがあった。

チカコは抵抗しなかった。そうなる事を半ば覚悟していたようでもあった。

予想通り、ヨシオカの絵は驚嘆の声を以って迎えられた。私がしたのは、絵の隅に私のサインを書き加えただけだった。

転向、変身、新生…。毀誉褒貶相半ばする中で、私はショパンに準えられ「水彩の詩人」と呼ばれるようになった。だが、画壇の寵児と持て囃される中で、私は不安に戦いていた。生活費を引き替えにしたチカコは何も言わないだろう。しかし、ヨシオカの病が癒えれば全てが明らかになってしまう…。

だが、〝運〟は私の方に向いていた。

チカコが夜の勤めに出ていた留守中、ヨシオカは血痰を詰らせ、息絶えてしまったのである。それ程に衰えていたという事なのか、いや、ヨシオカは〝絵画の神〟に見離され、私こそが〝選民〟となったのだ。

貧農の出だったヨシオカの葬儀は簡素なものだった。そして、ヨシオカの後を追うようにしてもう一人、チカコが首を吊った姿で発見された時、人々は当然の成り行きとしての悲劇と受け止め、チカコの死を誰一人、疑ってみることさえしなかった。

私の手許にはヨシオカの絵が遺った。

安堵と、しかし、焦りがあった。何もかももうバレることはない。だが、ヨシオカの遺した絵には限りがある。この絵が尽きた時、私の名声も尽き果ててしまうのだ。

私は恩師の伝手を頼って新聞社の社長に訴えかけ、ヨシオカの言っていた美術同人誌を創刊して美術顧問の地位を得た。私の名望が尽きる前に、私は私の地位を不動のものにして自らが権威となり、名誉を受ける側から授ける側にたつのである。

私のアイデアは成功した。私はこの地方の長老と呼ばれ、画壇の権威となった。確立した権威は独り歩きを始める。私は絵を描く必要さえなくなった。たまに手慰みの小品を描けば、それが私の筆であるというだけで人々は持て囃し、ありがたがるのである。

十年一日、千篇一律、異曲同工…。賢しらな理屈を並べ、頭でっかちの評論家が何をほざこうとも、私はひと言「君達は絵というものが分かっていないのだ」と嘆いてみせればいい。それが権威というものだった。

「……私が一生を絵画に捧げてきて思うのは親友ヨシオカ君のことです。彼は真の天才だった。しかし、病に侵され、満足な作品を遺せなかった。私は思うのです。私の絵を彼に見て欲しかった。天才ヨシオカに一歩でも

近付けたのかと問いたかった。その思いが美術同人誌創刊の切掛でした。若い画学生達のため、私にできる最善のことをしたかった。それが志半ばで倒れたヨシオカ君への餞（はなむけ）ではないかと。ヨシオカよ、君は……」

同じ台詞をくり返していると、いつか、それこそが事実だったのではないかと思えてくる。そして、いつの間にかそれが真実となり、私はヨシオカの事を思い出すたびに無二の親友の早逝に涙を流すようになっていた。

――時折、こんな夢を見る。留学時代のパリ。私の細密画（ミニアチュール）にヨシオカのサインがある。人々はヨシオカを盗作者と罵り、ヨシオカは自刎（じふん）して果てる。赦しを乞うて跪（ひざまず）くチカコを前に、私は仁王立ちになって絵筆を振り立てる。ところが、そうして出来上がった大作が、どうしても自分のものに見えないのだ。そこで私は絵の隅に〝ヨシオカ〟とサインし、眠れぬまま何物かに震え続けるのである。

寸評

若い二人の画家がいて、一人は胸を患いながら絵筆に魔術を込める天才肌ヨシオカ、もう一人は細密画のような線だけが身上の凡庸な絵描きの私。この対照的な二人が辿る運命を描いている。ヨシオカは肺病で無名のまま死んだ。私はヨシオカのスケッチブックの絵に自分のサインを入れ、画壇の巨匠になっていく。しかし、巨匠として賞賛されても、偽物である私の不安は消えない。達者な物語性が作品の特徴だろう。

佳

地球と社会のために

青森刑務所　S・R

ここ最近、ＳＤＧｓという言葉が新聞やテレビ・ラジオ等を通じて飛び交っています。意味は「持続可能な開発目標」で、いくつか達成すべき項目がありますが、その中で私が注目しているのが、物を作る際はそれが再生できる様に工夫したり、有限な資源を節約して使いより循環的な社会を目指すというものです。

私はこのＳＤＧｓに魅かれ、前刑を出所してからは小さな事ですが、コンビニやスーパーのレジ袋はなるべく買わないようにして、家から持参した袋を使ったり、油で汚れた食器を紙で拭いてから洗ったりしていました。プラスチックは自然分解されない人工物で、一度海洋にそれが放出されればマイクロプラスチックとなり事実上回収できずに永遠に海の異物と化します。やがて異物の増加で海洋生物とその生物を食す生物との間の食物連鎖は破壊され、その影響は無視できないレベルで人間社会に襲いかかってきます。今はまだ海も辛うじて正常と言えるかもしれませんが、近い将来に必ず海だけでなく山や森林等の至る所に存在する自然が崩壊していくでしょう。

今まで私は社会の傍観者としてただただぼんやりと生きてきましたが、テレビやインターネットを通じて知った環境の深刻化に私の心は大きく揺れ動かされました。私もこの社会の一員であり、地球環境を改善する為に多少でも何かできるはずだと考えるようになりました。無論、この巨大な地球という星に私個人が貢献できる事は微々たるものでしょうけれども、志を同じくする者同士が集まり、更により大きな共同体を作って協力していけば、ＳＤＧｓに対する想いや地球と社会への貢献的行動は波及していき、やがて地球規模の力になり得ると信じています。

今私は刑務所という限られた空間の中で限られた物を使用して生活しなければなりませんが、この制限のある中でもＳＤＧｓ的行為はできます。私が最も有効と考えるのは節水です。毎日大量に使用している水だからこそ、無駄な流水はできる限り避けたいものです。私がこの刑務所の新入訓練で聴いた講義に次のような印象的なものがあります。

「貴方達の使っている水の水道料は月四百万円もかかっている。水を使うなというのではなく、例えば十秒いつも流しているところを九秒で止めてみてほしい」

このようにある職員の方がおっしゃっていました。節水というのは、「節水をしよう」という意識が強くあってこそできるものだと思っています。

蛇口をひねれば簡単に出てくる水ですが、その安全な水を得る為には多くの労働力が必要であり、また、水も限りある貴重な資源であるという認識を持つべきでしょう。水無しでは我々は生きていけません。その水を安全な形で提供してくれる誰かがいるという事は忘れてはならないでしょう。つまり我々は他者の力によって生かされていると言えます。この事の重要性を理解すれば、水がいかに尊い物であるかが分かるのではないでしょうか。

節水以外にも、与えられたちり紙や石鹸等を大切に節約して使うという努力ができます。大切なのは、資源を安全に届けてくれる事に感謝し、その感謝の気持ちを具体的な行動で示すという事だと思います。地球や社会、人の為に何かをするという事は、周り巡って自分に返ってくるのですから。

今は自分にできる事は限られていますが、出所したらボランティア活動に参加したり、もしかしたらＳＤＧｓに関わる仕事に就いているかもしれません。少なくとも今よりできる事は増えるでしょうし、社会への貢献度も格段に上がるはずです。節水、節電だけでなく、脱炭素、新資源利用等の今よりも次元の高いＳＤＧｓ活動ができるでしょう。

今まで私は自己の利ばかりを追求した格好の悪い生活をしていましたが、それでは社会人として失格である事に気付きました。社会の恩恵を享受している以上、私自身も社会へ何かを還元するのが世の道理です。便利な生

活を創造してくれる社会と、豊かな資源を齎(もたら)してくれる地球を守る為に、今後もＳＤＧｓを掲げて貢献活動を行っていこうと思います。

寸評

最近、ＳＤＧｓという言葉が新聞やテレビ、ラジオ等を通じて飛び交っている。その意味は「持続可能な開発目標」で、物を作る際は再生されるように工夫し、有限な資源を節約してより循環的な社会を作ることだという。節水もそうだし、コンビニやスーパーのレジ袋もなるべく買わなくすることも資源の節約になる。この筆者は自分の利益ばかり気にしてきたが、社会復帰したら地球を守るためＳＤＧｓの活動に参加すると言う。

佳

「道をひらく」を読んで

福島刑務支所　S・S

私は、松下幸之助著の「道をひらく」を読んで、自分の歪んだ価値観や人生観、卑屈な考え方や見方を思い知らされました。そして、自分の根本的な問題点を痛感し、著者の言葉に感銘を受け、読み終えた時はやっと問題解決の糸口が摑めたと号泣してしまいました。ずっと暗澹たる思いで進んでいた自分の道に、一縷の明るい光を見い出せたからです。

この本には、人生をいかに生きるべきか、という教訓が書かれていて、私は今迄ずっと、真剣に志を立て改善更生に励んでも、空回りして挫折し失敗した理由が、やっと分かりました。そして、書かれている格言や、著者の呼びかける言葉を読み進めていくうちに、宝物を見つけた気分になりました。これから私が、自分の道を開いていく上で、必要なアイテムを一つずつ見つけ出せた気がして心強く、励まされて、勇気づけられたからです。

私が一番心に刺さった言葉は、「治にして乱を忘れず」です。これは、世の中が平和な時でも、いつまた戦争が起こるか分からないのでその用意を忘れてはいけないという格言です。それを著者は、人生には晴れの日もあれば雨の日もある。好調の時も不調の時もあるのにも拘らず、晴れの日が続くとつい雨の日が忘れがちになる。雨の日に傘が無いのは、天気の時に油断してその用意をしていなかったからで、同様に好調の波が続くとつい油断してしまう事を戒めて、「治にして乱を忘れず」と喩え諭してくれたのでした。私は、これは正に自分の事だと慚愧の極みに陥りました。

私は、何度も同じ過ちを繰り返し今回で六度目の服役中です。改善更生を誓い出所しても、僅か一ヶ月で再犯し、服役となった事もありました。しかし、前回出所した時は、一年半は社会生活を送れていたのです。今、思えば、改善更生の為に入院治療もして、退院後は改悛の念で遵法意識を高めて生活し続けた賜物だと思います。しかし当時の私は、始めて一年以上も社会生活をした自分に驕り、家族からも喜ばれ持て囃されて、遂に改善更生出来たんだと過信して、慢心してしまったのでした。謙虚さも忘れ油断した結果、未だに服役中の私はこの本を読んで、当時の状況が走馬灯の様に蘇り、反省しきれませんでした。著者の、「雨が降れば傘をさそう。傘が無ければ一度は濡れるのも仕方ないが、二度と再び濡れない用意だけは心掛けたい。雨の傘、人生の傘、いずれも傘は大事な物だ」という言葉に共感し、諭されて人生の教訓とする覚悟です。これからは、どんな時もこの言葉を忘れずに、好調の波が続いても油断せず、予て普段から危機感を持ち、慎重に規範意識を高め生活し続ける覚悟を固められました。

他に感銘を受けた言葉の一つに、「断じて行えば鬼神でもこれを避ける」がありました。これは、始めは実行不可能かと思われる事も、断固として行えば、それを妨げる障害はない、という格言です。著者はこれを、人生には誰でも程度の差こそあれ苦難はあるから、その時にどう考え対処するかで幸、不幸、飛躍か、後退かが決まると教え諭してくれたのでした。「困り果ててどうしようも無いと諦めれば、心が狭くなり知恵も出ず挫折して、原因も責任も全て他に転嫁する」という言葉で、甘い、弱い、狡い、悪い自分を思い知らされました。

私は毎回出所しても、困難に遭遇すると、自分勝手な思い込みで先走り、服役してたからです。社会は厳しいと覚悟して生活してたはずなのに、前科が知れ解雇となり絶望して、犯罪に逃げていた時もありました。自分勝手に服役となったくせに、出所後再会した多感な年頃の娘達が、自分の思う様な反応や言動をしてくれないと、思い込みで絶望して自暴自棄となった挙げ句、再び犯罪を犯して現実逃避してたと気づき慚愧に堪えない毎日です。そして、著者の「困難を困難とせず思いを新たに決意を固く歩めば、困難がかえって飛躍の土台石である」という格言で、肝心なのは考え方であり決意で、困っても困らずに困難な時こそ、試練だと見方を変えて、ピンチをチャンスにして挑む覚悟を固められました。

現在私は、歪んだ心を正し、見方を変える為に認知改善療法に積極的に

取り組み、考え方を変える訓練をしています。そして一つの事実にも見方を変えれば、コインの裏、表の様なプラス面とマイナス面があると気づき、それからはずっと陽転出来る様に心の特訓もしているのです。著者からの、「何事も行き詰まればまず見方を変える事」という言葉に発破をかけられたからです。他にも「富士山は西からも東からでも登れる。道はいくらでもある」という言葉に感銘を受け背中を押されたのです。そして、著者の「人は無意識の中にも一つの見方に執して、他の見方がある事を忘れがちで行き詰まったと言う。行き詰まらないまでも無理をするから心が貧困になるちょっと見方を変えれば良い」という言葉で、怠惰で愚かな自分を痛感して反省しきれませんでした。今迄ずっと頑なな態度で、家族の言葉にも耳を傾けずに、虚勢を張っていたのも、私の事件に繋がる問題の一つだと気づけたからです。これからは、素直に謙虚な気持ちも忘れずに何事も家族に相談する覚悟です。

私はいつも迷惑をかけ続けた家族に償い、一日も早く挽回しようと焦っていました。迷惑をかけ続けた後ろめたさから、完璧な母親を目指して妥協出来ず、自分にハードルを高く上げ過ぎてたと反省しました。家族にも見栄を張り、弱音を吐かず、弱味を見せまいと虚勢を張り無理をしていたから、そんな自分や生活に悶々としていたと痛感し、慚愧の涙が止まりませんでした。完璧な母親でなければ、信用、信頼を取り戻せない等と、一つの見方に執していたと痛感したからです。見方を変えられれば、信じて待っていた娘達は、何度も服役となり裏切る私に、疑心暗鬼になるのは当然です。信用、信頼を取り戻すのも、並大抵ではなく時間がかかるのも当然でした。これからは、過去に拘らず有りの儘の自分を認め受け入れて、完璧を求めずに、感謝の気持ちを忘れずに謙虚に生活する覚悟です。

そんな私を励ましてくれた格言が「徳、孤ならず」です。正しい事はいつか必ず人々に理解して貰えるという意味に通じると励ました上で、また一挙に事が成るという事は無く、一挙に事を決するという事を行えば、必ずどこかに無理が生じるから、辛抱強く根気良く続ける心構えが必要だと諭してくれたからです。そして著者の、「慌ただしい人の世、浮き足立って、辛抱の美徳、根気の美徳が失われがちだが、お互いに二省、三省したいものである」という呼び掛けに感銘を受け、勇気を頂けました。人格者である著者でさえ失われがちだと訴えているのだから、私は特に肝に銘じなくてはいけないと悟れたからです。

他にもこの本は「人事を尽くして天命を待つ」事が重要だと教えて諭してくれました。これは、力の限り努力してその結果は天に任せるという格言です。著者は、天命とはこれだけの事をしたから、これだけの成果が得られるという計算高いものではない。まして私心多く成すべき事も尽くさずに、徒らに都合良き成果のみを期待するのは、天命知らざる事、甚だしいとも指摘して諭してくれたのでした。

私は、家族の気持ちも考えずに、自分の事ばかり考え期待して求めてばかりだったと反省しきれないです。家族と一緒に居られるだけで幸せだったのに、自分でその幸せを壊していたと気づかされたからです。そして、完璧でないからこそ、自分に完璧を求めて焦り、挽回したかったと反省しました。

これからは、いつまでも過去に拘らずに、前科も含めて駄目な自分を認め受け入れて、焦らずに残りの一生涯をかけて、家族に償う覚悟を固めました。完璧を求めずに、出来る限りベストを尽くす覚悟です。改善更生に最善を尽くす為には、何事も素直に本音で家族に話をして、力を抜こうと思いました。力が入り過ぎていたから、空回りして焦り、失敗していたと悟れたからです。最善を尽くす事と、常に全力を出す事は違うと分かったからです。

私は、松下幸之助著の「道をひらく」を読んで、改善更生の為には、どうすべきか、これからはどう生き進むべきかがはっきりと分かり、人生に希望が持てました。

何度も同じ過ちを繰り返し、自分自身にも絶望した私が、この本に出遭えたのは、神様からのプレゼントで、最後の更生のチャンスだと思いまし

た。私はこの本を、人生の教訓として、困難に遭遇したり、自信を失いかけた時にも読み返して、日々自己研鑽し精進していく覚悟を新たにしました。暗雲に一筋の陽を差し込んでくれたこの本に感謝して、自分だけに与えられている掛け替えのない道を開き、更生に向けて希望を持って迷わずに進んでいきます。

寸評

松下幸之助の著「道をひらく」を読んでの感想文。一番心に刺さった言葉は「治にして乱を忘れず」だった。世の中が平和でも、いつ戦争が起こるか分からないのでその用意を忘れてはいけない。人生には晴れの時もあれば雨の日もある。晴れが続いても雨の日の用意も忘れるなということ。この筆者は六度目の服役中だが、社会へ出ているうちに油断して罪を犯したことが何度もあり、同じ過ちを繰り返したくないと自覚している。

佳

研修は策士のもとで

山形刑務所　十三郎

私が研修として派遣される先は、吉村さんが責任者の工場と決まった。言い渡しをしながら上司は何やらニヤニヤしている。私の指導係の西潟さんは、

「えっ、良かったね、ラッキーだよ。私も吉村さんの所だったからさ」

その言葉で、勝手に優しくて面倒見のいい人なのかと想像してしまう。どんな人かな。人となりが気になるところだ。

「見た目は普通のおじさん。小太りで、声が大きくて、押しが強くて。何かあると、まっ赤な顔になって、怒鳴るの」

えっ、ちょっと待って、おじさんで、まっ赤になって怒鳴る人が、なんでラッキーなの。知らないうちに横にいた課長が、

「そうそう。僕も何回か怒鳴られたことあるしね」

と、にこやかに話す。

ええっ、課長を怒鳴るの。ただの怖い人じゃん。それが良かったね、ラッキーだよって、頭おかしいんじゃないの。

「僕も含めて、今の課長連中は一回は怒鳴られてると思うよ。吉村さん、僕の二年先輩なせいもあるんだろうけれど、『お前のような了見で、安心して部下が仕事できると思っとるのか』ってね。そういうことを、ストレートに言ってくれるんだ」

私は生まれてこのかた、怒鳴られたことがない。アニメの主人公のセリフではないが、「親にだって怒鳴られたことないのに」だ。ただでさえ研修って緊張するのに、そこに怖さも合わさって、研修を迎えることになった。

研修初日の朝になった。時間より早めに工場へ行き、工場長に挨拶したはずなのだが、よく覚えていない。緊張と怖さが大きくて、周囲の状況を感じられなかったのかもしれない。制服に着替え、吉村さんの元へと案内してもらう道すがら、案内の人に疑問をぶつけてみた。

「吉村さんって、どんな方なんですか」

「ひとことで言えば、主かな」

主かぁ。いまひとつイメージがつかめない。

「声が大きい人だって聞いたんですけど」

「そうそう。倉庫の詰め所での声が、倉庫の一番奥で聞こえるくらいだからね。でもね、頼れる人よ。出入りの業者は、本当に信用しているみたいよ。主より親方ってほうが良いのかもね」

そう聞いて、少し安心した。どうやら怖いだけの人ではないらしい。ちょっとだけ気が楽になった。

詰め所のパソコンの前に吉村さんがいた。自己紹介をすると、満面の笑顔で、

「吉村です。よろしくお願いします」

と丁寧に礼をされた。

「昨日、西潟が電話寄越してな。よろしくお願いしますってな。まかしとけって言っといたわ」

ありがたいなと思った。きっと私が怖がっていることをわかってのことだろう。

「西潟から何か聞いているかもしれんが、手取り足取り教えることはないから。まず自分で考えること。自分で考えて、未熟でもいいから自分で答えを出してみる。それを俺にぶつける。一ヵ月って短いからね。呑気に構えていらんないよ」

怖さはなくなったけれど、自分で考えて、自分で答えを出すことが求められた。一難去ってまた一難だ。

研修が始まって十日が過ぎた。徐々に出入り業者にも顔が知られるよう

になって、少しずつ現場の楽しさがわかるようになってきた。最初に言われたように、吉村さんは何ひとつ教えてくれない。ひとつひとつの作業については理解できるけれど、それが一本の線につながっていかない。私が難しい顔をしていても、

「若いうちは頭を使って考えろ」

と言われるだけ。こんな思いをするくらいなら、怒鳴られたほうがましだ。ここ一週間、そんな思いを抱えている。

午後になって、入車が途切れた。プラットホームの掃除をしていると、

「こんにちは。吉村さんいる」

と声をかけられた。茶髪の女性ドライバーだった。乗ってきた4tトラックを接車して、詰め所で何やら話したあと、戻ってきた。

あれ、おかしいな、4tトラックって、20m^3くらいしか積めないのに、何でだろうと思って尋ねると、積み荷の内容の変更を頼んだのだとか。

「吉村さんがここの責任者になって、初めてやってくれるようになってね。ここで始まって、半年後には全部の工場に展開してね。私たちは大喜びでさ。あとドライバーの運賃ってさ、トラック一台でいくらの人と、荷物一個いくらの人がいるんだけど、あの人は、それにも対応してくれるの。だから、みんなここに来たがるの」

「そこまでやる必要あるんですかね」

「普通はないよね。他の業者の人に聞いても、いろいろと便宜し図っているみたい。みんな口を揃えて言うのは、あの人がNOを出したら絶対だけど、こちらの言い分はきちんと聞いてくれるって。そんな荷主はいないよ」

彼女は少しだけ遠い目になって続けた。

「私なんか、私生活のことで叱られてね」

彼女は三人の子どものシングルマザーなのだそうで、

「こんな仕事で、安い給料でって愚痴ったら、たとえこんな仕事でも、子供三人育ててるんだろう。もっと胸を張れ。その姿を見て、子供は育つんだって。私、泣いちゃって」

きっと、まっ赤な顔して言ったんだろうな、吉村さん。

「そういうことをストレートに言ってくれる人だね。ただ仕事ができるってだけじゃない。なんだろうね。よくわかんないけど、顔を見たり、声を聞いたりすると、安心する。携帯の番号、ドライバーに教えてるしね」

私は何も言えなかった。言葉が見つからなかった。たしかにドライバーに限らず、どんな人との間でも、相手の意向を聞いた上で結論を出すのが常だった。

「ああいう人と一緒に働けるのは、幸せなことかもしれないって、私は思うんだよ」

西潟さんが、良かったね、ラッキーだよって言ってた気持ちが、わかるような気がした。

「お前、真美と何を話しとった」

吉村さんは、ニコニコしながら探りを入れてきたが、「いろいろです」と言葉を濁した。

「まあ、何でもええけれど。要は、答えはひとつでも、そこにたどりつく道のりは、幾つあってもいいし、どのルートをたどってもいいってことだ。大事なのは、実際に手がける人が納得すること。説得するひまがあるのなら、やりたいようにやらせてみればいい」

「でも譲れないことには、NOを出して」

「そういうこと。その流れをきちんと作っておけば、主導権は向こうが握っているように見えても、実はこちらがコントロールしている。納得しているから、相手は悪い気はしない。わかるやろ」

「それって、手玉にとっているってことですよね」

「嫌な言い方すんなよ。でも、まあそういうことやな」

彼の話は続く。

「人間は完璧なんてあり得ないんだから、完璧を求めるんじゃなくて、完

壁に近づけるよう最善を尽くすのが肝心。それには、互いの意見を擦り合わせてスタートするのが大切だと思うな」

正直、私の考えはそこまで及ばない。でも、仕事に限らず、これからの人生にとって、とても大切な考え方を教わった気がした。これはラッキーなことであろう。

吉村さんのイメージが一変した。直情的で怖い人から、人の行動を見極めて策をめぐらせる老獪な策士へと。場違いかなと思いつつ聞いてみた。

「好きな戦国武将って誰ですか」

「黒田官兵衛だな」

即答だった。

寸評

研修で派遣される工場の責任者は吉村さんと決まった。私の指導係の西潟さんや課長は「良かったね」と言うが、「大きな声で怒鳴られた」との声も耳にした。研修先の工場に行き、吉村さんに挨拶した。「手取り足取り教えることはない。自分の頭で考えろ」と言われた。観察してみると、吉村さんに対する出入り業者の評判はいい。相手の望みを察してやりやすいようにコントロールしている。研修のいい責任者に巡り合えたと納得した。

詩の部

審査員

宮城県芸術協会会員
日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問

原田勇男

金

願い

福島刑務支所　K・A

大地を照らす太陽や、恵みの雨を降らせる大空や、癒しを与える月の光のような特別な力は何もない。

人ひとりの力なんてちっぽけで、世界を変えることは難しい。

何かを変えたい時、守りたい時、救いたい時、その手に取るのは武器であってはならない。その手は誰かにぬくもりを与えられるかもしれない。その手は誰かの涙を拭うことができるかもしれない。その手は誰かの背中を支え、押すことができるかもしれない。

人ひとりができることはほんの小さな事かもしれない。けど、ひとりひとりが誰かを想い手と手を取り合えたなら、それはどんな力よりも大きく、どんな力よりも強く、どんな武器より強力で、いつか世界が優しさに満たされる時が来るかもしれない。

想像してみてほしい、争いのない世界を。想像してみてほしい、その手で何ができるかを。想像してみてほしい、大切な人の笑顔を。

その手でできることはたくさんあるはずだ。その手でできることは特別な力を持っているはずだ。

だって、その手にはいつだって愛で溢れているのだから。

寸評

世界は分断と殺戮にまみれている。この筆者は「何かを変えたい時、守りたい時、救いたい時、その手に取るのは武器であってはならない」という最も根源的な考え方を示す。そして「想像してみてほしい、争いのない世界を。想像してみてほしい、その手で何ができるかを」。そして「人間の手のぬくもりには愛があふれている」と結ぶ。この言葉が今の時代には必要なのだ。不穏な時代を生きる糧になる言葉。文句なく金賞に推す作品である。

銀

十花十色

山形刑務所　Y・T

もし自分の居場所がみつからないなら
それは場所が違うだけ
そこはあなたが咲く場所ではなかっただけ
だから自分を責めないでね
必要とされていないなんて思わないでね
どうせ自分は花開かないと諦めないでね
花にはいろんな種類があって
いろんな咲き方がある
太陽に咲く花あれば月に咲く花もある
砂漠に咲く花あれば湿地に咲く花もある
どんな花もすべて美しい
あなたが咲ける場所は必ずある
だから大切な蕾を枯らす前に
あなただけの居場所を探しに出かけてみてね
じっくり探せばいい
でもどうか心が枯れるその前に
自分を認めてあげる水を沢山あげてね
場所が違えば咲ける花もある
あなたに合った咲き方がある
それぞれ違ってそれぞれ素敵
みんな違うことが当たり前
だから個性を認め合おうね
世界にひとつだけの花を

寸評

「もし自分の居場所が見つからないなら／それは場所が違うだけ」と自分探しへの誘いを促す。確かに花には色んな種類や咲き方がある。だから自分が咲ける場所をゆっくり探せばいいと、この作者は言う。自分固有の生きる場所が見つかれば、それが自分の居場所ということだろう。簡単なことではないが、自分探しと自分の居場所を求めてトライするのも、この時代を生きる意義と合わせて必要なことではないか。

銅

和歌の浦波

宮城刑務所　K・Y

友垣に袖をひかれて　始めし短歌
初めは品詞も文法も　調べさえも呑込めず
油の切れかかった暗いランプの様だった
だのに今も　私は歌を創り続けている
況(まし)て能動的にだ
何故なら　貴重な時間が血の様に流出する
吾(あ)が境涯の表現手段として
短歌を選んだからだ
つまり惚れてしまったのだ
三十一(みそひと)文字に

千三百年間も受け継がれてきた
五七五七七(ごしちごしちしち)という魔法の杖
定型のリズムを得た言葉らは
生き生きと泳ぎ出し
不思議な光を放つ
其の瞬間が好きなのだ
短い歌ということは
表現にとってマイナスというが
私はそうは思わない
何故ならば
自分の中の　ごちゃごちゃを切り捨てて
表現を究竟まで削ぎ落としてゆく
そして最後に残った何かを
定型という網で捕まえるからだ

言葉を切り捨ててゆく緊張
言葉を切り取ってくる充実
其れが短歌の魅力だと思う
然(さ)ればこそ私は泳ぎ続けるのだ
どこまでも渺々として蒼い
言葉の海を

寸評

短歌の表現に魅せられて、自分の境涯を短歌で詠む道を選んだ。その告白とも言うべき事実を詩で書いている点が面白い。私の友人で30代はじめに短歌を書いていたが、短歌結社になじめず退会。50歳を過ぎて父の死を契機に詩を書き始め、2冊の詩集を持つ詩人がいる。どちらがいいとかの問題ではない。それぞれの人生にあって、表現の世界に踏み込んだ運命を感じる。短歌の好きなK・Yさんの気持ちが素直に伝わってくる。

佳

親友へ

山形刑務所　豆太郎

友よ　ありがとう

「元気？」
君はいつも気遣ってくれたね
「大丈夫？」
何かあると優しく励ましてくれたね
「がんばれ」
手紙の結びにはこの言葉を綴ってくれたね
「あきらめないで」
くじけそうなときは背中を押してくれたね
「そばにいるから」
どんなに遠くへ離れていても心はつながっていると教えてくれたね
「待っているから」
塀の中にいるような僕にそう言ってくれたことが嬉しくて泣いたよ

友よ　どうして逝ってしまったの？
僕らは必ずまた会えると約束したのに
悲しいよ　お別れさえ言えなかったなんて
寂しいよ　君がいないこの空は

友よ　何一つあたりまえのものなんてないと知ったよ

友よ　人に想いを伝える大切さを知ったよ

友よ　与えられてばかりの僕が君のように与える人になってきたよ

友よ　忘れないよ
君と過ごした日々　君がくれたもの

友よ　見ていておくれ
僕はここで強く生きていくから

友よ　ありがとう
さよなら　親友

寸評

いつも自分のことを気遣ってくれ、励ましてくれる親友。挫けそうな時や塀の中にいる自分に対して「待っているから」と言ってくれる親友の存在はとても貴重だった。しかし、その彼が死んでしまった。その衝撃は大きいが、「人に思いを伝える大切さ」や「与えられるばかりの僕が君のように与える人になってきた」と自覚した時、親友と生きた日々が思い出になり、自分が強くなると決意する。自立への足がかりを感じさせる作品だ。

佳

止まない雨

山形刑務所　龍齋

雨がそぼ降っている
忘れもしないあの日から
しとしと　しとしと　降り続けている
鉛色の空の下で　身も心も濡れそぼち
雨しとどになり立ち尽くしている
雨は傷に深く滲み入り　痛みをともない
いつまでもその傷口を閉じさせない
痛くて　辛くて　苦しくて
その傷を庇うように身体を抱きながら
いっそ忘れられたなら楽になるのにと
でも決して忘れることなどできないと
降り続く雨の中で立ち尽くしている
頬をつたう雨もそのままに
しとしと　しとしと　雨はそぼ降っている

雨は今日も降っている
忘れてはならないあの日から
しとしと　しとしと　降り続けている
鉛色の空はまるで　誰かの心模様
あの日に戻りたくても戻れない
あの過ちを改めたいと　思ったところで
今さら後悔したところで　もう遅い
傷つけて　奪って　苦しめて
愚かな自分を責めても　悔やみ続けても
過去をなかったことにするのはできない
贖いたくてもできぬ罪　償いきれぬ罪
できることと言えば　せめて忘れないこと
この同じ空の下　心を痛めている人がいる
しとしと　しとしと　雨はそぼ降っている

雨はこれからも降り続ける
私はその中を歩いて行く
冷たい雨に打たれて　強い風が吹きつける
それでも後戻りすることなく歩を進める
そんな日々の中で　僅かでもいい
雲の切れ目から陽の光が射し込み　せめて
傷ついた人の心を温めてはくれまいか
私はそう願って　雨がそぼ降る空を仰ぐ

寸評

雨が降りしきっている。忘れられたなら楽になると、でも忘れることができない雨が降っていたあの日。あの過ちを改めたいと思ったところで、今さら後悔したところで、もう遅い。人生にはこのような雨の日がある。だからせめて心を痛めている人に、雲の切れ目から陽の光が射し込み、傷ついた人の心を温めてくれまいかと祈る。結局、人はこの止まない雨のなかを歩き続けなくてはならない。自分の心を見つめながら。

佳

今日も一日

福島刑務支所　S・S

深呼吸朝の陽気を手で掬い
引き寄せてみる今日の活力
本当に大切なものは
目に見えないものだから…
小さな幸せを見逃さない
求めている幸せは特別な瞬間よりも
日常の中にあるもの
大切な事は気づく事
他人と比較しなくても
幸せを感じる事は出来る
自信を持とうとする事よりも
自信を失くさない様にしよう
自分にある物だけに目を向けて
自分の為だけに時間を使う
自分が幸せにならなければ
大切な人を幸せにする事は出来ない
何が起きても笑った分だけ幸せがある
泣いた分だけこれからがある
守る物があるという事は
守られているという事
深呼吸一呼吸おいて冷静に
考えてみるもう一度
口から出た言葉は
目に見えないものだけど…
行動は見せる事が出来る
自信をつけたいなら
周りの目を気にしない事
大切な事は楽しむ事
現実は変えられなくても
気分や行動は変える事が出来る
出来た数よりも頑張った数を数えよう
比べるなら昨日の自分と
信じるのは今日迄の自分を
人と比べているうちは幸せは訪れない
どんな事も頑張った分だけ結果がある
失敗した分だけ学びがある
大きな夢を持つという事は
大きな壁を乗り越えるという事

寸評

「深呼吸朝の陽気を手で掬い／引き寄せてみる今日の活力／本当に大切なものは／目に見えないものだから／小さな幸せを見逃さない」という冒頭の言葉に打たれた。生きることを肯定するような姿勢が印象に残った。この人の作品はどこまでも前向きで、未来へ向かって羽ばたいて行こうという思いが込められている。「大きな夢を持つ事は／大きな壁を乗り越えるという事」という結びも、エネルギーを秘めている。

短歌の部

審査員

日本歌人クラブ会員
「地中海」会員
宮城県芸術協会　運営委員
宮城県歌人協会「地中海湾の会」代表

上林　節江　先生

金

癌に逝きし　吾子の遺品の　中にある
手話教本の　折り目を開く

宮城刑務所　K・Y

寸評：我が子の生きた痕跡をとどめる「折り目」を見つめ、開きいく切なさ。感情語を使わず、行為の描写で思いを表現。それゆえに、一層強く作者の思いが伝わります。

金

桎梏の　窓に映りし　稜線に
この道程の　起伏をなぞる

山形刑務所　夜風

寸評：桎は足かせ、梏は手かせで「しっこく」と読みます。稜線の起伏になぞらえて自分の人生を表現していると感じます。それは「桎梏」「道程」「起伏」の醸し出す力です。

銀

物音の　一つだにせぬ　夜の更けの
月の光は　獄衣を射せり

山形刑務所　弘雀

寸評：厳粛さの漂う短歌。真夜中の月を見上げ、やがて眼は獄衣に移動します。そこで掴み取った現象を「獄衣を射せり」と表現しました。「だに」の使い方が効いています。

銀

人の世に　来世あるなら　母よ母
再度御身に　我れ宿し給も

山形刑務所　Y・T

寸評：「母よ母、給(たも)れ」と母に呼び掛けた表現が良いです。言外に「今度こそ親孝行します。」という思いが込もっています。下の句を「ふたたび御身に我を宿し給」とすれば整います。

銀

座布団に　つまずき転びて　ひとり笑ふ
玻り戸の月が　しんと見てをり

宮城刑務所　M・K

寸評：場面が絵になり浮かびます。思わず笑ってしまった自分と、月とを対比させて深い味わいが出ました。この順番だからいいのです。「月がしんと見てをり」という表現がみごとです。

銅

十年に　一度の寒波を　獄(ひとや)にて
しもやけの手を　さすり忍びつ

山形刑務所　獄右衛門

寸評：「十年に一度」「しもやけ」の具体により、どれ程身に堪える寒波かが伝わります。特に、数字がいい。結句は「さすりて忍ぶ」と、現在さすりながら耐えているとした方が、臨場感が強まります。

銅

塀の外　残しきたもの　想ふたび
我の心は　静かに腫るる

山形刑務所　N・T

寸評：「心が腫るる」という衝撃的な表現に目が止まりました。心が痛ましい思いに乱れて膨れ上がったのでしょう。「腫るる」は文語表現で、「残しきたもの」は口語表現。統一しましょう。

銅

ありがたい　五時半起きの　弁当も
財布から出た　千円札も

福島刑務支所　I・K

寸評：家族との面会の場面ですね。「五時半起きの弁当」「財布から出た千円札」という具体に、家族の思いが伝わります。それを素直に「ありがたい」と受け止めており、いいなと思いました。

銅

隠せずに　流れる涙　訳言えず
心も梅雨と　戯けて拭う

福島刑務支所　N・M

寸評：このような思いも、行為もよく分かります。「心も梅雨」と「　」でかこみ、セリフとすると相手の存在が出てきて一首が広がります。このセリフが効果を出しています。

銅

手足伸び　柚子の香(か)鼻を　くすぐれば
湯気のむこうに　笑顔広がる

福島刑務支所　F・N

寸評：「手足伸び」「柚子の香」「湯気」「笑顔」と、安らぐ言葉で一首を織りました。冬至の日のゆず湯は風邪を引きにくくするとか。明るい短歌に心が和みました。

佳

長雨の　止みし朝(あした)の　明るさよ
外窓開けて　眺む八甲田

青森刑務所　S・T

寸評：長雨に鬱鬱と過ごしてきた心を、晴天により「明るさよ」と転換した所がヒット。三句目に思いを置いたこともいいのです。結句は、字余りになっても「八甲田山」と。固有名詞ですから。

佳

遠花火　音だけ聞こゆ　塀越しに
隅田の夜を　思ひ浮かべぬ

青森刑務所　夢幻齋

寸評：現在の現実「音だけの遠花火」から回想が始まり「隅田川の花火」へと思いが広がったのでしょう。現実からどう想像を広げるかは、短歌の重要なテクニックです。本作品は、成功しています。

佳

コロナ禍に　部屋の出られず　風呂も無く
各自洗濯　震災と似る

宮城刑務所　T・S

寸評：コロナ禍と大震災の共通点を「部屋を出られず」「風呂もなく」「各自洗濯」と、三つの具体を挙げて述べており説得力があります。それに事寄せて、自分の今の生活を見つめているようにも思います。

佳

悔やみても　悔やみても　悔い残る
父の寿命を　われ縮めしと

山形刑務所　曼珠沙華

寸評：悔いる思いが、ひたひたと伝わります。三度繰り返される「悔い」という言葉が思いを強調しており、短歌の技法として成功しています。二句目を「悔やみてもなお」と七音にしては、どうですか。

佳

同囚の　壊れかけをる　靴を見て
我がゆく道の　長さを想ふ

山形刑務所　K・Y

寸評：「靴」という具体物の、「壊れかけている」という現象を通して歳月という長い時間を見つめています。大切なのは、その歳月を通してどのように心を研き人間として成長するかではないでしょうか。

佳

吐く息が　色付き出した　行進で
曲がる指先　叱咤が響く

山形刑務所　鴉林檎

寸評：日常の一端が見える短歌。「色付き出した」は隠喩（暗喩とも言う）で、意味的には「白く見え始めた」となり、冬の日の吐く息の白さを表現しており、これが入賞の決め手になりました。

佳

親ゆびと　ひとさしゆびで　輪をつくり
こんなに大きな　雪が降ってる

福島刑務所　N・T

寸評：降りくる雪の大きさを、愛らしく、かつ、具体的な行為によって表現した点がヒットです。寒さを雪のサイズで表しました。童謡のような世界が広がります。この事も、この短歌の良さだと思います。

佳

ペラペラの　紙一枚に　細い文字
すてにすてれぬ　魔法の物体

福島刑務支所　K・Y

寸評：「細い文字」の主は誰でしょう。捨てることが出来ないとありますから大切な人からの手紙なのでしょう。「物体」では無機質なので、例えば「お守り」とか「宝」とか暖かい言葉にしてはどうでしょうか。

佳

月（あれ）とって　だだこねた子の　手を握り
影をふんだは　遠き日となり

福島刑務支所　H・S

寸評：「手を握り影をふんだ」の表現がいいです。大切な思い出ですね。「「月（あれ）とって」とだだこねた子の」と会話（セリフ）に「　」をつけ、助詞「と」を入れるとリズムが整いますよ。

佳

苦しくも　共に在るぞと　筆を執る
文読む先の　君を想ひて

盛岡少年刑務所　秋水

寸評：毛筆で手紙を書いているのでしょうか。そうでないならば「ペン」に。「読む先の君」という表現が目を引きました。明確に相手に向かって書いているという思いが伝わりました。

俳句の部

審査員

現代俳句協会宮城県支部幹事
宮城県俳句協会常任幹事
宮城県芸術協会会員

鈴木　三山　先生

金

夏の雲　一寸先は　エルニーニョ

青森刑務所　S・R

寸評：令和五年の夏はとにかく猛暑続きであった。エルニーニョ現象はその一員であると言われる。作品では猛暑と言わないでそのことを示唆している点が素晴しい。

金

痩せ秋刀魚　お高くとまり　澄まし顔

秋田刑務所　I・K

寸評：近年温暖化のせいで秋刀魚の不漁が続き、特に令和五年は猛暑の影響で水揚げが極端に減ってしまった。かつては大衆魚だった秋刀魚は今や高級魚となり、店先には痩せた秋刀魚がお高くとまり澄まし顔で並んでいる。

銀

鮎の川　勝負の機微は　竿の先

宮城刑務所　T・S

寸評：釣り好きにとって鮎漁の解禁は待ち遠しいものと見える。鮎釣りは竿の先の微妙な感覚に神経を研ぎ澄ますのがたまらない面白さなのだろう。時には川の中に入ってじっくりとあたりを待つ姿は風物詩でもある。

銀

靴音の　固き看守や　寒四郎

宮城刑務所　伏龍

寸評：刑務所の中は時間ごとに看守の見回りがあり、その都度緊張を強いられることだろう。寒い季節になると、靴音がやけに固く感じられるようである。句はK音を巧みに用いている。

銀

ジャズ流す　ラジオブースに　晩夏光

福島刑務支所　F・H

寸評：夏も終わりに近い頃である。一杯汗を流し人生を謳歌した夏も過ぎ行く寂しさが、ジャズの流れているラジオブースに射す晩夏光によって表現されているようである。

銅

春炬燵　ひらがなだけの　メモ見けり

青森刑務所　爽愛

寸評：どうにか寒い冬も乗り切り春を迎える頃となったが、炬燵はまだそのままである。いわゆる春炬燵であるが、その上にひらがなだけのメモがあった。急いでいたのか胸に迫るメモだった。

銅

新米の　飯ひとつぶも　残すまい

青森刑務所　T・H

寸評：昔からお米は一粒たりとも粗末にするなと言われて来た。特に猛暑に耐えてやっと収穫できた昨年の新米は、等級が下がったとは言え一粒たりとも残さずに食べたいものである。

銅

古書店を　守る店主や　春の月

宮城刑務所　A・H

寸評：今や情報化社会も電子化が進み、昔ながらの書店は減る一方である。それでも必死で書店を守って行こうと頑張る店主に、春の月が暖かく見守っているかのようである。

銅

雪嶺に　彫刻ほどこす　霊の影

山形刑務所　天聖

寸評：雪に覆われた嶺は実に芸術的な姿を見せる。特にくっきりと晴れた青空に映える雪嶺には、山に宿る霊が彫刻を施しているのではないかと思わせるほどである。実に雄大な捉え方である。

銅

その内に　時価と書かれる　秋刀魚かな

山形刑務所　鴉林檎

寸評：すっかり高級魚となってしまった秋刀魚は、不漁と豊漁とで値段が上下する。従って時価としてあるのは高級魚のことでもある。大衆魚だった昔を懐かしんでいるようだ。

佳

献立の　不満も何処ぞ　秋の茄子

青森刑務所　信玄餅

寸評：秋茄子は嫁に食わすなと言われるほど美味だとされる。句のように料理の献立に不満があっても秋茄子とくれば不満も解消である。

佳

くしゃみせし　パンダの鼻から　蝶が舞う

宮城刑務所　N・S

寸評：パンダは世界中の人から人気のある動物の一つである。きっとやや寒さの残る春先の風景であろう。動き回るパンダがくしゃみしたら、鼻先から蝶が舞い出たのである。

佳

蒼天を　ゆく雄心の　夏つばめ

宮城刑務所　M・K

寸評：今年も燕のやって来る季節となった。自由自在に空を飛びまわる燕は、子育てに一生懸命である。特に雄の燕は必死で餌を求めて青空を飛び回っている。

佳

父の日に　結婚しますの　文に泣き

宮城刑務所　H・N

寸評：普段子供に世話をやかなかった親の気持ちが出ている作品である。立派に育って結婚することになった我が子が、父の日を選んで便りを送ってくれたことに感涙したのだろう。

佳

囀りの　中を歩荷（ぼっか）の　すたすたと

宮城刑務所　K・Y

寸評：歩荷とは山小屋の荷物を運んだり、登山者の荷物を運んでくれる職業の人のことである。中には100kgもの荷物を背負う人がいたが、鳥の囀りの中をすたすたと行く姿は眩しいほどである。

佳

梅雨空に　響く雷鳴　父が逝く

山形刑務所　曼珠沙華

寸評：人が亡くなるということは、魂が天に還ることでもある。また梅雨の雷は梅雨明けを報せるとも言われる。いずれにしろ父が亡くなり恰も後は頼んだぞとの父の言葉とも思えたのだろう。

佳

アマリリス　今にも話す　気配あり

山形刑務所　梵天丸

寸評：アマリリスは夏の季語。大輪の花の一つで、花言葉は色別にそれぞれあるが、一般的にはおしゃべりとか誇りとなっている。目立つのでいかにも今にも話し出すようだとはぴったりする。

佳

ひぐらしや　母にも子にも　逢えぬまま

福島刑務所　A・Y

寸評：ひぐらしは日本全国におり、日の出前と夕暮れにカナカナと鳴き出す蝉の一種である。どことなく郷愁を誘う鳴き声であるが、作者のように母にも子にも会えない境遇であれば尚更だ。

佳

鶯が　めざまし時計の　塀の朝

福島刑務支所　A・M

寸評：塀の中での暮らしにとって、鳥たちの鳴き声は一番の癒しかも知れない。中でも鶯の鳴き声は春の訪れとともに朝の心地よい目覚めをもたらしてくれる目覚まし時計のようである。

佳

頂（いただき）に　残雪光る　岩手山

盛岡少年刑務所　Y・H

寸評：岩手山は岩手県民にとってはまさに古里の山そのものであろう。朝な夕なに岩手山の雄姿を仰ぎ見て祈りを捧げる。特に頂に残雪の光る岩手山は神々しいほどである。

川柳の部

審査員

宮城県川柳連盟 理事

水戸 一志 先生

金

もっと鳴け　命十日の　蝉の声

宮城刑務所　M・K

寸評：蝉の短命を擬人化して、叫びたいことがあってもままならぬ人の世を恨む。同時に、命ある限り自分は精一杯生きると誓う。蝉の命十日は必ずしも正確である必要はない。

金

叶えたい　夢があるから　踏ん張れる

福島刑務支所　I・A

寸評：山あり谷ありは人の常。苦しいときも希望を失わなければ、明日へ向かって生きる原動力になる。目新しい発見ではないが、衒いのないシンプルな表現に好感が持てる。

銀

手中にも　あった四つ葉の　クローバー

宮城刑務所　伏龍

寸評：クローバーの野原を想像しただけで、童心に返る。まれに四つ葉が混じっていて、幸運の予兆とされるが、この句は大人。うかつにも手中の幸せに気付いていなかった。

銀

降る前は　怖いだろうか　雪たちも

福島刑務所　O・T

寸評：地上に積もった雪ではなく、空から降ってくる雪に感情移入している。あんな高い所から、雪でも足がすくむのではないか。ナンセンスの中に詩情が漂う。

銀

スマホから　この指止まれ　闇バイト

盛岡少年刑務所　K・T

寸評：簡単に金が稼げる、というスマホの闇バイト求人。正体不明の指示役が、スマホから強盗や詐欺の実行犯を操る。簡単な仕事にだまされて、一度首を突っ込んだらおしまい。

銅

同じ風　早く咲く花　遅い花

秋田刑務所　Ｏ・Ｔ

寸評：世の中の不公平を嘆くのか、それとも人それぞれの面白さを眺めているのか。藤圭子「夢は夜ひらく」を連想。上五「同じ風」に込めた作者の思いは、問わないことにしよう。

銅

いつの日か　母抱きしめる　僕の夢

山形刑務所　新雅

寸評：高齢の母がいる。事情があって直接手を握り合うこともできない。古今、母を恋う詩（うた）は多く、書き記すことが慰めになってきた。下五の体言止めが思いの強さを物語る。

銅

洗顔を　少しゆっくり　春の朝

山形刑務所　鴉林檎

寸評：一日の始まりに吸う空気から春の訪れを感じ、じわっと元気が湧く。その抽象的な瞬間を「洗顔を少しゆっくり」と具体の情景で表現した。非凡な感性。

銅

左、右、　行進の足　悔い刻む

山形刑務所　夜風

寸評：リズミカルな行進だが、置かれた環境の厳粛さと原因の軽率を噛みしめる足踏みにならざるを得ない。自己の内面を表現するのは勇気がいる。自信を持ってよい一句。

銅

背中押す　私不在の　家族写真

盛岡少年刑務所　飴と月

寸評：家族写真に自分が写っていない。強烈なインパクトを前向きにとらえた。過去に類似句があるかもしれないが、作者にとっては確かな立ち直りのシーンであろう。

佳

脱マスク　次なる目標　脱炭素

青森刑務所　S・R

寸評：長かったマスク着用期間。5類に移行し、状況が少し変わったが、地球にはまだ温暖化という大きな課題がある。中八音は「次の目標」で七音にできる。

佳

石仏の　笑み父母の愛　思いだし

秋田刑務所　N・Y

寸評：どこの石仏か、にっこり笑った表情に両親の慈愛を感じた。そのとき、笑って返せば親にも通じただろう。

佳

「まってるね」　妻のひとこと　応援歌

山形刑務所　千寿

寸評：貴重な応援を胸に刻んで頑張る姿が見えてくる。書き出しの会話体が句をやわらかく仕上げる効果となった。

佳

夏空に　馬鹿になりたい　ビーチサイド

山形刑務所　ヤーマン

寸評：若者の弾けるような自由が夏のビーチを駆けている。まだ、何をしたいかがつかめていない幼さでもある。「馬鹿になりたい」とはおそれ入った。

佳

コロナ禍で　日常となる　ノーメイク

山形刑務所　Y・T

寸評：マスクの下に化粧は無駄。コロナ禍の三年余りを極端に表現した。まさに飾り気の一切ない句。時を経て記念碑的価値の一句となろう。

佳

大谷の　投打とウィンク　射抜かれる

福島刑務所　A・F

寸評：ベーブルースさえも上回ると言われる大リーグのスーパースター大谷。テレビカメラにウィンクする映像が目に焼き付いている。撃ち落とされたい気持ち、よく分かる。

佳

少子化の　波も高し　鯉のぼり

福島刑務所　A・H

寸評：高々と五月の風に泳ぐ鯉のぼり。近年の都市事情では少なくなったが、郊外で見かけると少子化の救世主のようで頼もしい。高さを強調した映像描写が見事。

佳

イヤになる　立っては忘れの　繰り返し

福島刑務支所　E・M

寸評：何をしようとして席を立ったのか、着いた所で真っ白け。別にイヤにならずとも、われらの年ではごく普通。ユーモア句としても合格。「の」を省いて中七音にしたい。

佳

味噌汁の　訛りも美味い　旅の膳

福島刑務支所　Y・H

寸評：旅館の朝ごはん。パートのおばさんが地元訛りで味噌汁や漬物の地産地消を説明してくれる。おおらかな気分になれる。

佳

七夕に　揺れる恋風　君想う

福島刑務支所　Y・M

寸評：七夕まつりの吹き流しの印象と、一年に一度、男女の逢瀬伝説が交錯する。作者にはどちらも記憶の中に刻まれた映像として、大事にして欲しい。「揺れる恋風」が切ない。

文芸部門審査総評

―作文の部―

応募原稿を読んで、それぞれの真摯な思いが入った作品が多かった。「十年」は離婚した妻の連れ子で血のつながりのない息子が、受刑者の両親と面会に来てくれたエピソードが感動的だった。「心境の変化」は苦労して育ててくれた母の気持ちも知らず、勝手な言動を繰り返したあげく施設に入ったが、そこで自分を見つめ母への心境の変化を書いている。「ヨシオカ」は若い画家同士の友情とライバル心を背景に画壇のスキャンダルを表現している。佳作の二篇「地球と社会のために」「『道をひらく』を読んで」は、刑務所の中で自分を見つめ、社会復帰後の生き方に言及している。佳作の「研修は策士のもとで」は研修の実態と人間像がよく書けている。惜しくも佳作を逃した「愛の味がするブルボン」は、東日本大震災後に被災地で生きる人間像とドラマの片鱗を感じたが、誤字や言い回しが舌足らずな点が評価を下げた。原稿は何度も読み直してから応募してほしい。

原田　勇男

―詩の部―

今回はK・Aさんの「願い」という作品に出会ったことが収穫だった。相次ぐ他国侵略で、世界は不穏な空気に包まれている。人間はどうして武器を持ち、殺戮し合うのか。紛争の火種はほかにもある。私たちはこの不条理な現実から目をそらしてはいけない。その意味でも「願い」という詩は金賞にふさわしい作品だと思う。Y・Tさんの「十花十色」も優れた詩である。自分の居場所に悩む人は多いだろうが、この世を美しくする花にはたくさんの種類があり、その咲き方も千差万別。だから人間も自分を表現できるのにふさわしい場所を探せばいいという考え方は心に残る。K・Yさんの「和歌の浦波」は和歌と詩の融合のような作品だった。三賞や佳作以外の作品にも、自分の人生を検証し再生への思いを込めた詩が多数あった。これからも精進を重ね、また挑戦してほしい。そのためには他人の作品もよく読むこと。何回も推敲して質の向上を図ることが大事である。

原田　勇男

―短歌の部―

寄せられた短歌百三十三首の中から二十首を入賞作品として選考しますから、内容の良いものや、自分の言葉で思いや発見したことを表現していることを選考のポイントにしました。

○入賞した作品は、「折り目」、「月光が獄衣を射す」、「稜線の起伏」、「しもやけ」、「壊れかけた靴」、「細い文字」など、様子をよく観察して一首に具体的な言葉で盛り込みました。こうしますと、作者の見つめているものや訴えが焦点化され伝わりやすくなります。そして、何を思い、考えたのかを自分の言葉で表しましょう。誰かの言葉や文章を引用する時であっても、自分の考えを述べることが大切です。

○漢語（熟語）は、かみくだいて表しましょう。〈例：再度→ふたたび。各自→めいめい〉また、一首の中に漢字が多いと固い印象を受けますから、九字くらいにしましょう。

上林　節江

―俳句の部―

皆様真剣に俳句に取り組んでいただきありがとうございます。

今回は以前に比べて、明るい句や爽やかな句が多いように感じられました。よく辛い時は明るく、楽しい時は控え目になどとも言われますが、楽しんで俳句に親しんで頂くことが何よりと思います。

人間にとって自然に学ぶことは数多くあります。また落ち込んだ時などは何物にも代え難い癒しとなってくれます。

今後とも歳時記を片手に、大いに季語を覚えて素晴らしい作品をものにできますように心より願っております。

鈴木　三山

―川柳の部―

束縛を受けている成人の川柳を選ぶという行為は、悩ましい役目だと感じました。共通の課題を出さない「自由吟」なのに、参加者の発想が「刑務所発」という同じ枠に集まり、選別に迷うことになりました。

選者の側も余計な感情移入に陥ったり、公平より温情に走ろうとしたり。頭の中から受刑者を追い払うことはできません。そういう目で見てしまう自分を叱りながら、希望、発見、感謝などをキーワードに、よい句を厳選しました。

水戸　一志

絵画の部

審査員

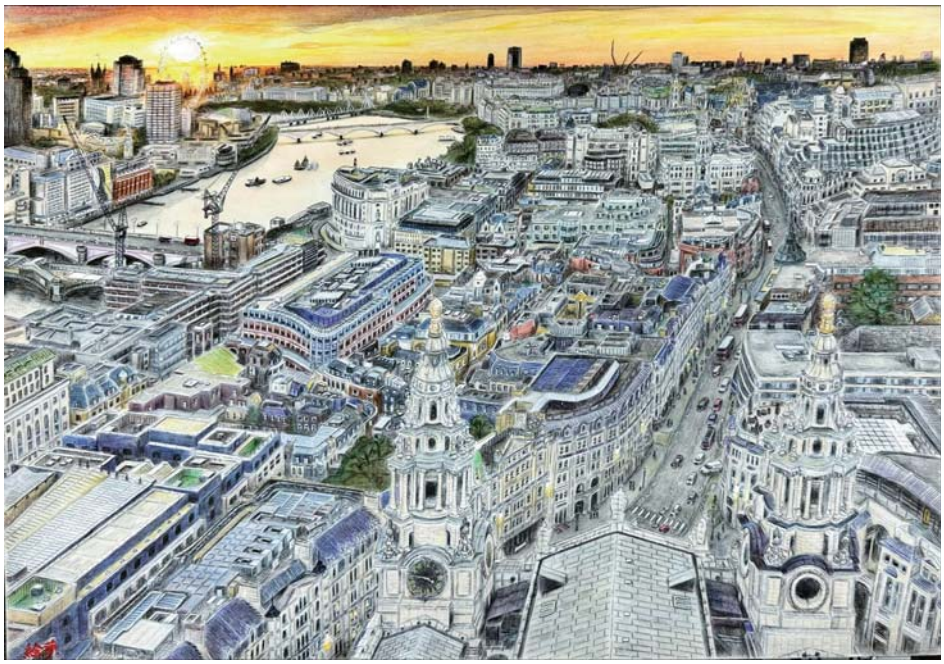
宮城県芸術協会運営委員

枡澤　怜　先生

金 パブ(・ランチ)で、にぎわう人々

宮城刑務所　W・M

寸評：建物と人物のバランス共に群を抜いている。



銀　ロンドン　街並　セントポール大聖堂から

山形刑務所　絵夢．M

寸評：建物を細部まで表現した労作である。

銀　ハレの日～歓喜～

福島刑務支所　S・J

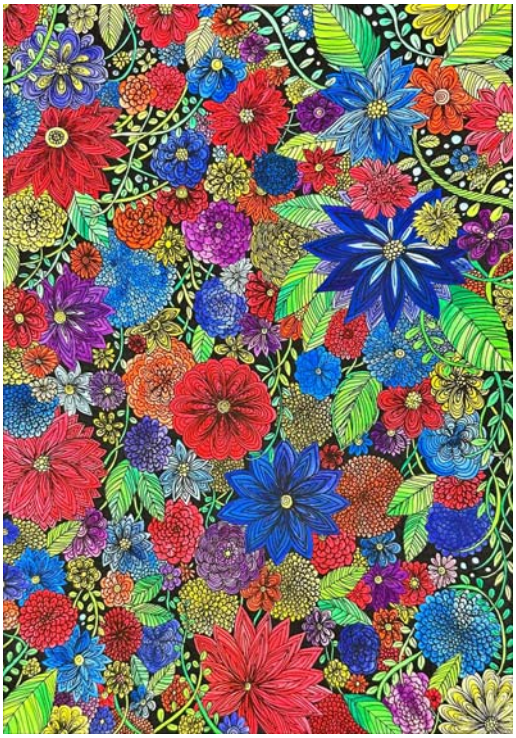
寸評：鶏２羽の表現が秀逸。

銅

銀波

福島刑務所　Ｉ・Ｎ

寸評：さわやかな墨彩画が心にせまってくる。



銅

百花繚乱

福島刑務支所　Ｋ・Ａ

寸評：花の絵のコントラストがすばらしい。

銅

難海

盛岡少年刑務所　Ｔ・Ｙ

寸評：全体をブルーでよくまとめている。

佳

画竜点睛

青森刑務所　T・T

寸評：墨絵風のさわやかな描写で心なごむ絵。

佳

遊びもいいですが、
おやつはまだですか？

山形刑務所　オタクＩ

寸評：猫の表情が生き生きして実在感がある。

佳

芝桜

福島刑務支所　E・M

寸評：富士山をバックに美しい芝桜をうまく表現した。

佳

島国

盛岡少年刑務所　H・T

寸評：バランスのとれた色調、のびのびと描いている。

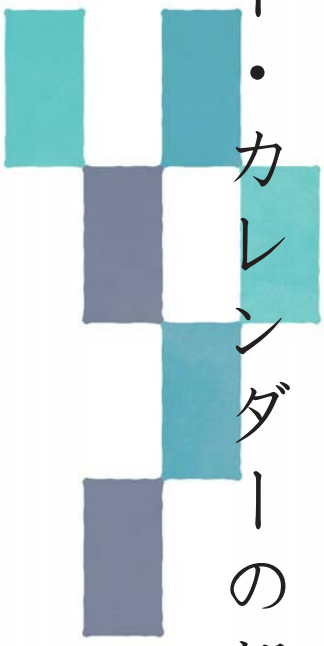
佳

まだまだマスクは必要です

宮城刑務所　O・K

寸評：202人の超人たちひとりひとりを根気強く描いた労作。

ポスター・カレンダーの部



審査員

宮城県芸術協会運営委員

鈴木　智枝　先生

金

熱中症対策

山形刑務所　檸檬牛乳

寸評：文字が美しくレタリングされていてとても良い。飛び散る水などうまく表現されています。

銀　和敬、共存

福島刑務支所　N・M

寸評：多様な顔が美しく描かれ楽しい。テーマも納得です。

銅　月より団子

山形刑務所　U・S

寸評：カレンダーとしての数字が美しい。８月に合う図柄で、彩色が素晴らしい。

佳　広がる輪

福島刑務所　Y・T

寸評：虹の中に組まれた手とテーマがよいです。全体に強い色彩が欲しい。

毛筆の部

審査員
東北書道会副会長
鈴木霽月先生

金

孔明泣いて馬謖を斬る

宮城刑務所　雅凰

寸評：北巍朝の力強さに満ちた作品。

銀　隷書八言聯

盛岡少年刑務所　S・Y

寸評：文字造形の変化に富んだ作品。

銀　謝榛

宮城刑務所　舞龍

寸評：作品制作の基本を修得しており文字造形・筆線共に素晴らしい。

銅

不屈

福島刑務所　A・F

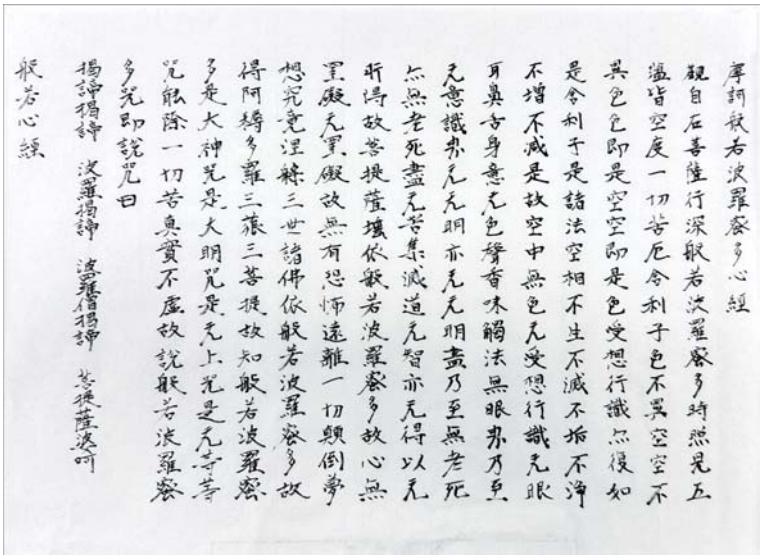
寸評：字形・筆線共に素晴らしい。

銅

観音経

宮城刑務所　白蘭

寸評：丁寧に根気良くまとめた努力作。



銅

般若心経

青森刑務所　北の信玄

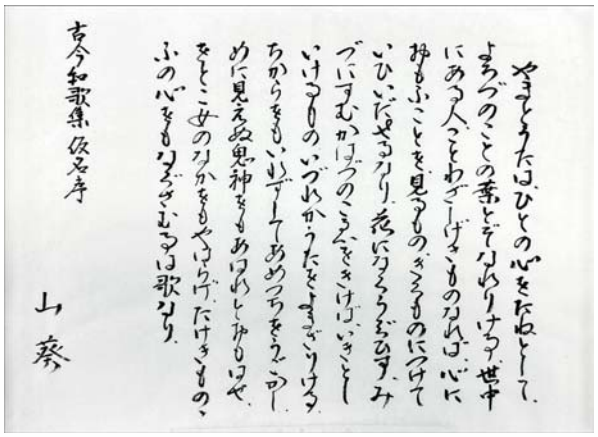
寸評：一字一字丁寧に美しくまとめた。

佳

道徳

宮城刑務所　和鵬

寸評：隷書の基本を修得した練度の高い作品。

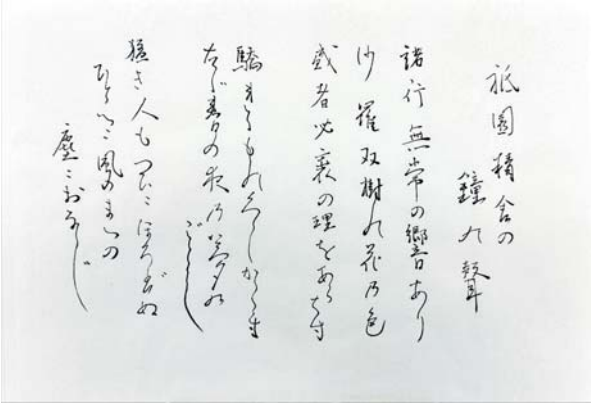


佳

古今和歌集 序

山形刑務所　山葵

寸評：気負無く淡々と丁寧にまとめ上げた。



佳

平家物語

福島刑務所　A・H

寸評：作品構成・行の流れが美しい。

佳

白砂青松

秋田刑務所　K・M

寸評：伸びやかで力強い作。

佳

蘭亭序

盛岡少年刑務所　M・Y

寸評：古典の特徴をとらえている。

硬筆の部

審査員
東北書道会副会長
鈴木霽月先生

「誰にも言えない家庭の事情」

ゾーン

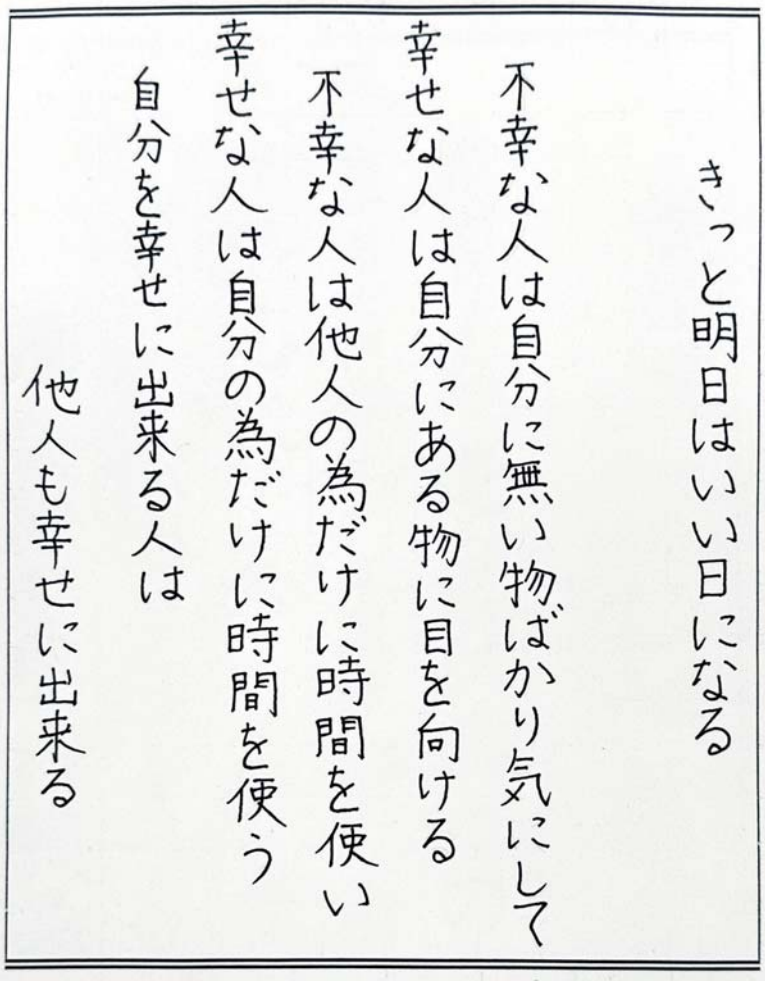
枯れるくらいに泣かせてごめん。
そっぽ中頭下げさせてごめん。
息子の面会ってどんな気持ち。
その帰り道ってどんな気持ち。
感謝しかない家庭の事情。

金

誰にも言えない家庭の事情

山形刑務所　ゴリ

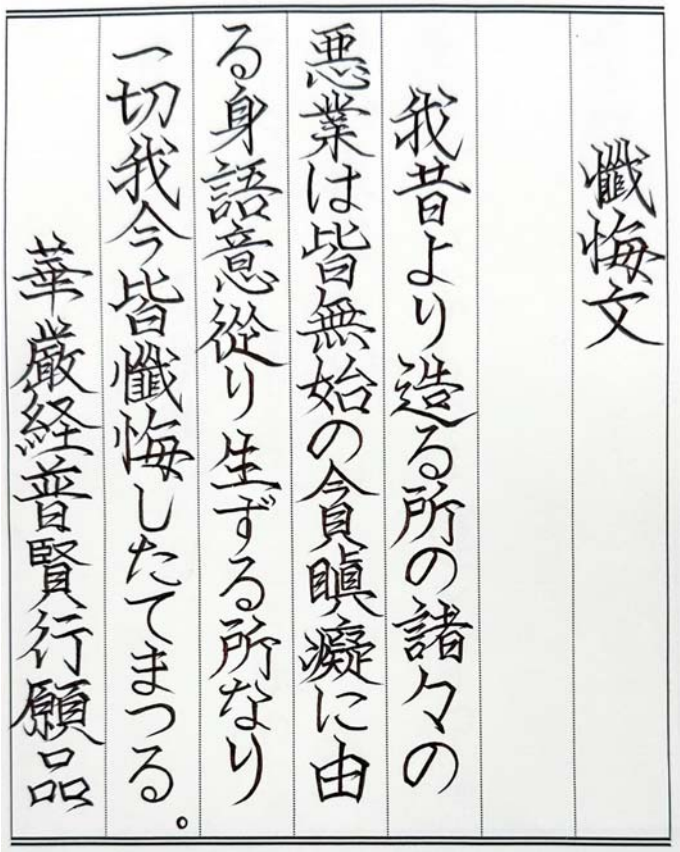
寸評：作者の心情が見る者に伝わる作品。



銀　きっと明日は
いい日になる

福島刑務支所　S・S

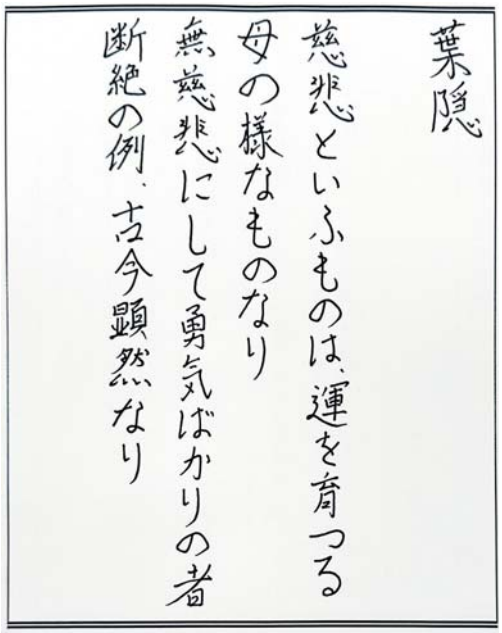
寸評：一字一字丁寧に美しく
まとめた。



銅　懺悔文

宮城刑務所　M・D

寸評：特異な書体で力強い作品。



葉隠

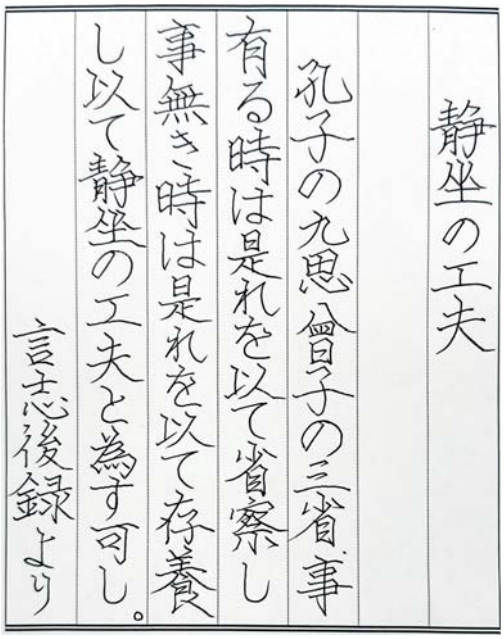
慈悲といふものは、運を育つる
母の様なものなり
無慈悲にして勇気ばかりの者
断絶の例、古今顕然なり

佳

葉隠

福島刑務所　Y・T

寸評：自然体で淡々とまとめた作品。



静坐の工夫

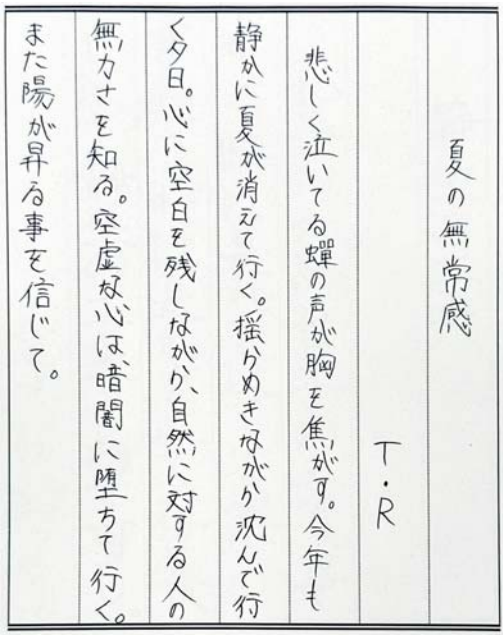
孔子の九思曾子の三省、事
有る時は是れを以て省察し
事無き時は是れを以て存養
し以て静坐の工夫と為す可し。
言志後録より

佳

静坐の工夫

宮城刑務所　M・D

寸評：慎重かつ丁寧に書作している。



夏の無常感

T・R

悲しく泣いてる蟬の声が胸を焦がす。今年も
静かに夏が消えて行く。揺らめきながら沈んで行
く夕日。心に空白を残しながら、自然に対する人の
無力さを知る。空虚な心は、暗闇に堕ちて行く。
また陽が昇る事を信じて。

佳

夏の無常感

盛岡少年刑務所　T・R

寸評：誰しもが持っている終わりゆく夏の情景を表現した作。

書画部門審査総評

―絵画の部―

昨年よりバラエティーに富む佳い作品が多く出品され、レベルアップを感じた。指導に当たられた先生方に感謝を申し上げたい。

枡澤　怜

―ポスター・カレンダーの部―

どの作品もしっかり描いてあり、素晴らしい。残念な作品で、テーマを画面に描いてないものがありました。テーマと絵が一致していること、カレンダーは数字のレタリングをしっかりすると、もっと良くなる作品が多くありました。

鈴木　智枝

―毛筆の部―

年毎に作品全体のレベルの向上が見られ、日頃の研鑽の成果が感じられる。

鈴木　霽月

―硬筆の部―

作品の題材の選択が、出品者の心情や現在の状況を如実に著している様に感じられる作品が多かった。

鈴木　霽月

編集後記

本年度も、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なる御協力のもと、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

仙台矯正管区

「みちのく」成人編第44号
令和６年３月発行

編集発行　仙台矯正管区第三部
〒984-0825　仙台市若林区古城３－２３－１
TEL　０２２－２８６－０１７８

仙台矯正管区

過去の作品はこちらから
御覧いただけます→

仙台矯正管区

仙台矯正管区フロントページ
https://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00002